

徒然の記 その十四

失われた火の文化

給湯器を設置してからは、使いたい時にはいつでも湯が使えるし、浴槽に湯が満ちるのを待つだけで入浴できるようになったので、便利にはなりましたが、風呂焚き、…薪を作って火を燃やす知識や技術は無用の長物になってしまいました。

家庭の燃料に、ガスが使われるようになると、竈(かまど)やコンロが不要になりました。団扇(うちわ)、火吹き竹、火箸、十能(じゅうのう)、火消し壺など…それまで台所や風呂の焚き口に置かれていた、火にかかわる道具類も、世の中から姿を消してしまいました。

こうしたものは、古民具の展示場へ出かければ、今でも見ることができます。

しかし、若い人たちには、それらの使い方までは、わからないでしょう。

便利さと引き換えに、古くから伝わってきた火の文化は、道具と共に失われてしまいました。

これは、火に限ったことではありません。

鎌(かま)や鍬(くわ)や鋤(すき)などの農具類、足踏み式の脱穀機や唐箕(とうみ)などの農機具類も姿を消し、これらを使う技術も失われてしまいました。

年寄りの感傷と笑われてしまいそうですが、あれこれ書いているうちに、過ぎ去った日々への哀惜(あいせき)の念がこみ上げて来て、我にも無く往時の時空に想念を走らせることがしばしばありました。

完